

墨古沢南 I 遺跡

—縄文のムラを概観する—

猪股昭喜

1. はじめに

墨古沢南 I 遺跡は、北側を印旛沼に流れ込む高崎川が東から西に向かってやや傾きながら走り、その支谷が 2 本調査区の北東と南西の方向にのびており、支谷をはさんで北西に向かって突き出す舌状台地の根本の、標高35mから36mの台地上に位置する。この度の調査は、東関東自動車道酒々井パーキングの拡張工事に伴う発掘調査で、平成11年8月から同12年7月まで調査を行った。道路をはさんだ北西側には墨古沢遺跡¹⁾、南側には墨木戸遺跡²⁾等がある。

今回の調査面積は約13,500m²である。全体図をみると、調査区北側に直径約30m程の円形の広場が確認される。ムラの中央広場と考えられる。その周囲に小竪穴群、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などがぐるりと取り囲むように渾然と存在し、さらに南東の隅には陥穴群がある。遺物を見ると、わずかに縄文時代中期阿玉台式や後期加曽利 B 式と思われるものが含まれるが、主体は加曽利 E 式それも E III から E IV が中心と考えられる。また、調査区南東側の遺構の密度が低いのは、その部分が第 VI 層辺りまで削平されてしまっているためである。したがって比較的掘り形の深い土坑などは残っているが、住居跡などはほとんど消滅してしまい、炉の焼土や柱穴のピットなどがわずかに残存しているという状態である。本来は北東側と同じような密度で遺構が分布されていたものと考えられ、典型的な縄文時代中期後葉の環状集落を形成していたと推定される。検出された竪穴住居跡は約50軒、土坑数約530基（その内小竪穴と考えられるものは約350基）、陥穴22基、掘立柱建物跡は4軒（建物の形にならず木柱列と考えられるものも数軒ある）を数える。

2. 集落の姿

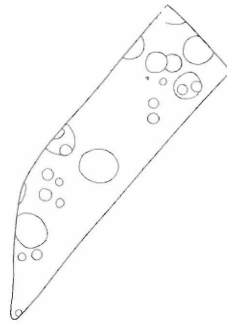
ここで、集落の元の姿の推定復元を試みてみたい。遺跡の北側には高崎川の支谷が入り湧水もある。その台地上に住居が建てられ、ムラの中心には円形の広場が設けられる。全体の広さは、中央広場の中心から最も外側の住居跡まで約100mあり、少なくとも直径200

m、面積30,000m²をかなり上回る環状集落が想定される。最も残存状態のよい部分を45度分切り取って、その部分の遺構数を数えてみると、竪穴住居跡22軒、小竪穴92基であった。それを8倍すると、竪穴住居約170軒、小竪穴は優に700基を越える集落跡であったことが推定される。縄文時代中期のムラの一時期の住居数と人数は、5～10軒、1軒あたり人数5人程度、また竪穴住居の耐用年数を15年程度（伊勢神宮式年遷宮の20年を目安とし、焼失その他の事故等でやや短く考える）として計算すると、このムラは、人口40～50人、実に短くて255年、長くて510年間という長い期間存続していた集落ということになる。³⁾

環状集落は縄文時代の代表的な集落形態である。竪穴住居が環状に配列され始めたのは、前期であるという。千葉県でも早期の大網山田台遺跡群No.4遺跡B地区⁴⁾では、大型住居跡に隣接した形で炉穴が楕円形状に配列されているものの、まだ住居が環状になるまでには至っていない。前期になると、松戸市幸田貝塚⁵⁾などが大規模な環状集落を形成してくる。さらに中期には関東地方だけでなく、北陸や中部地方でも広く分布するようになる。千葉県では松戸市の子和清水貝塚⁶⁾や船橋市の高根木戸貝塚⁷⁾などが典型的な例としてあげられるだろう。

そこで墨古沢南 I 遺跡の環状集落の形態をみると、前述したように、直径30m程の中央広場がある。この部分からは何の遺構も検出されなかった。広場の約半分が削平されてしまっているために確実なことはいえないが、遺構空白地帯であったと考えられる。船橋市の飯山満東遺跡⁸⁾や四街道市の木戸先遺跡⁹⁾では中央に墓域をもつことが知られている。また、子和清水貝塚や千葉市の有吉北貝塚¹⁰⁾では、中央の空白地域の縁辺に小竪穴が広がり、その後に竪穴住居が周囲を埋めていく形になっている。

本遺跡の場合、広場の外側には、竪穴住居跡、小竪穴、掘立柱建物跡などが渾然と存在している。ここで注意することは掘立柱建物跡だろう。それらしき柱穴

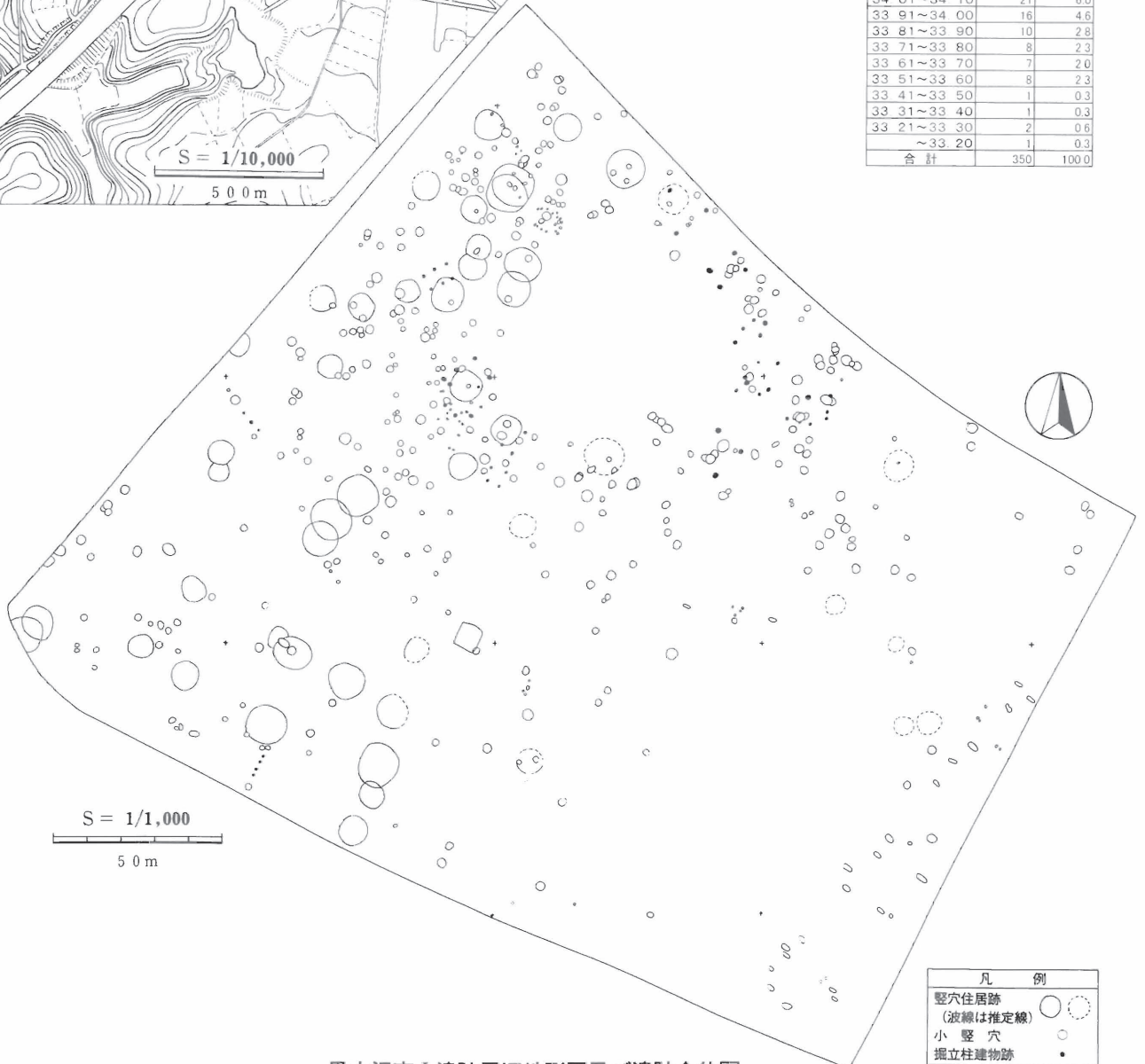


第1表 小竪穴群の上場長軸による分類

長軸 (m)	数量	%
2.01~	1	0.3
1.91~2.00	4	1.1
1.81~1.90	3	0.9
1.71~1.80	7	2.0
1.61~1.70	5	1.4
1.51~1.60	17	4.9
1.41~1.50	20	5.7
1.31~1.40	38	10.9
1.21~1.30	49	14.0
1.11~1.20	45	12.9
1.01~1.10	60	17.1
0.91~1.00	41	11.7
0.81~0.90	29	8.3
0.71~0.80	19	5.4
0.61~0.70	8	2.3
0.51~0.60	4	1.1
合計	350	100.0

第2表 小竪穴群の床上標高による分類

床上標高 (m)	数量	%
35.01~	17	4.8
34.91~35.00	19	5.4
34.81~34.90	35	10.0
34.71~34.80	31	8.8
34.61~34.70	34	9.7
34.51~34.60	29	8.3
34.41~34.50	23	6.6
34.31~34.40	29	8.3
34.21~34.30	35	10.6
34.11~34.20	21	6.0
34.01~34.10	21	6.0
33.91~34.00	16	4.6
33.81~33.90	10	2.8
33.71~33.80	8	2.3
33.61~33.70	7	2.0
33.51~33.60	8	2.3
33.41~33.50	1	0.3
33.31~33.40	1	0.3
33.21~33.30	2	0.6
~33.20	1	0.3
合計	350	100.0



凡例	
竪穴住居跡 (波線は推定線)	○ (波線)
小竪穴	○
掘立柱建物跡	●

墨古沢南Ⅰ遺跡周辺地形図及び遺跡全体図

のほとんどが広場の縁辺に存在するのである。穴の直径が太いものは80cm以上、検出面からの深さが1mを越えるものもあり、直径30~40cm程度の太さの柱が立っていたと推定される。しかし、この柱穴跡を建物の跡とした場合、4本目、あるいは6本目となるはずの柱穴がどうしても見つからず、三角形状、変形の五角形状等の形になってしまう遺構が数基ある。これをどう考えたらいいだろうか。もし、このように木柱が立っていたのだと素直に受け取ると、そこには3本組、あるいは5本組の木柱列が存在したことになる。その場合、新潟県の寺地遺跡¹¹⁾や石川県の真脇遺跡¹²⁾、長野県の阿久遺跡¹³⁾などの例とまた違った形態の木柱列が考えられるのではないか。そして、中央広場が祭祀の場であるとするれば、その縁辺に位置することも考えあわせ、この掘立柱建物もしくは木柱列が、何らかの祭祀と関連する遺構である可能性が高いと考えられるのではないか。ただ本遺跡の場合、墓域が見つかっておらず、中央広場の祭祀が葬送に関する可能性は少なくなるかもしれない。また、中央広場縁辺に掘立柱建物跡もしくは木柱列跡があるのは、後晩期に多い形態と考えられ、本遺跡の出土遺物が中期後葉であることから、移行期の形状を表していると考えられる。

竪穴住居跡については、柱穴がはっきりして住居の規模がつかめる遺構はわずか25軒と少なかった。その面積を平均すると13.84㎡となり、1人当たりの占有面積を約3㎡とすると、1軒の住居に住んでいた人数は約5人となり、前述の推定の裏付けとなる。埋甕があった住居は10軒、埋甕炉があった住居は5軒であった。

南東の陥穴群は大きく分けて4つの形状に分けられる。1群は早期のT型の陥穴、2群は楕円形でピットなし、3群は楕円もしくは隅丸長方形でピットが1基あるもの、4群は隅丸長方形でピットが2基あるものである。最も多い4群の大きさは、平均で長軸約1.45m、短軸約0.63m、地表からの深さは約2mとなっている。遺構に伴うと思われる遺物はないので即断はできないが、位置関係からいっても住居との直接の関係はないと考えていいのではないか。

3. 小竪穴群

次に小竪穴群について考えてみたい。第1表をみてわかるように大きさがまちまちである。最大のもので長軸の長さが2.06m、最小のもので0.52m程である。最も多いのが0.9mから1.3mの間でその範囲だけで約56%を占める。また、検出面からの深さは最も深いも

ので1.68m、浅いものはわずか10cm程度のものもあった。しかし、深さについては前述したように、南東部分が削平されているために単純に比較はできない。そこで床上の標高を調べてみると第2表のような結果となった。これを見ると、ほとんどの小竪穴の床上標高が34mから35mの間にある。調査区の発掘前の標高がほぼ35.5mだから、地表から最も深いもので約2.4m、最も浅いもので約0.3mとなり、全体の約80%が深さ0.5mから1.5mの間にあることになる。そして長軸と深さの関係をみると、最も深い小竪穴の長軸が1.28m、最も浅い小竪穴の長軸が1.12m、最大長軸の小竪穴の深さが約0.8m、最小長軸の小竪穴の深さが約1.5mとなっている。このことから、これらの小竪穴群は、大きさについては規則性を持った掘り方はされていなかったことが推測される。

小竪穴の性格は、堅果類・芋類などの貯蔵穴とするのが今の所一般的にとらえ方である。例えば、成人1人当たりの消費カロリーを考えたとき、クリ・コナラ・トチノミなどの堅果類でそれを満たそうとすると、1日1.5kg(3升)が必要となる。堅果類の収穫を秋の10月から12月頃までとし、翌年の春先までの5か月をそれで食いつなぐとすると、1家族5人で22石5斗の堅果類が必要となる。貯蔵穴の平均の大きさを、直径・深さともに1m程度とすると、その容積は約785リットル(4石3斗5升)となり、1つの家族は貯蔵穴としての小竪穴を4~5基もつこととなる。本遺跡で検出された小竪穴の総数は353基である。¹⁴⁾ ムラ全体の推定総数は700基を相当数上回ると思われるが、この数は住居の総数とよくつり合う。

穴の形状をみてみると、平面の形ではほとんどが円形を呈している。やや楕円形といえるものは17基であり、全体の5%にすぎない。また、壁もほとんどが垂直に落ちるか、もしくはやや狭まって落ちるかで、ほぼ円筒状を呈している。下にいくにつれてややふくらむ、いわゆる袋状のものは23基を数えるだけで、これも全体の約7%を占めるに過ぎず、そのふくらみかたもほんのわずかである。それに比べ、北東に隣接する墨古沢遺跡では、本遺跡よりも時期がやや早いとみられ、小竪穴の規模も相当大きくて、形状もはっきりしたプラスチック状の形をなしている。

覆土の状態は、自然堆積の様相はほとんどみられなかった。ハードローム・ブロックが穴の真ん中もしくは上部まで散在しており、人為的な埋め戻しが推測される。また覆土に、炭化物あるいは焼土が含まれてい

る遺構が120基以上あり、しかも覆土全体に広がっている場合がほとんどである。そのことも人為的な埋め戻しが推測される根拠にあげられるだろう。また、床直上あるいは中程に火床面が見つかった遺構もある。このような場合はたいへん大量の遺物を伴っており、単なる貯蔵穴としての利用とは考えられない。これも小竪穴の性格を考える上での材料となると思われ、今後の炭化物の分析が期待される。

遺物の出土状況をみると、埋まったあるいは埋め戻された時に入り込んだと考えられる遺物はほとんどの小竪穴に認められるが、床直上から検出され、何らかの意図を持って入れたのではないかと考えられるような小竪穴も数基ある。他にもまとまった土器片は出てくるが、覆土の途中からのものが多く、そのような土器は廃棄されたものとみられる。土器以外では、蛇文岩製とみられる長さ5.8cm程の磨製石斧と赤彩の土器片が伴って検出された遺構が1基、チャート製とみられる長さ3.5cm程の磨製石斧が検出された遺構が1基、翡翠の小珠が検出された遺構が1基、それぞれ見つかっている。これは実用というよりも祭祀的な意図が感じられる。その他、一部欠損しているが石棒と、石棒の一部と考えられる石製品が検出された遺構もある。石棒については、この他にもほぼ完形品が1点、一部のみのもものが1点で合わせて4点見つかっているが、残念ながら後の2点は調査前に見つけて保管されていた物で、出土地点が特定できていない。また、細かい黒曜石の剥片が覆土上部に多量に含まれていた小竪穴が数基あり、剥片の廃棄場所として利用されたか他の利用があったかのどちらかであろう。

4. まとめ

以上墨古沢南Ⅰ遺跡の概観をまとめてみたが、ここでもう一度振り返って疑問をまとめてみる。

・中央広場縁辺の柱穴は、掘立柱建物跡なのか、御柱のような施設なのか。また、その施設の目的は何か。

・小竪穴の性格は大方は貯蔵穴といわれているが、その他にどんな用途があったのか。本遺跡南方に位置する墨木戸遺跡では、小竪穴の覆土の残存脂肪酸分析の値が人間の骨によく似ているという結果が出たということも合わせ¹⁵⁾、遺構・遺物の位置、覆土等の分析を詳しく進める必要がある。

・遺跡南東の土坑群をとりあえず陥穴群としたが、その他の可能性はないか。

・中央に広場を作り、それを中心に環を作って住居や掘立柱建物あるいは木柱列、貯蔵穴を構成していく、

その源は何か。旧石器時代にも環状にブロックを作ることにはよくあり、本遺跡にも、縄文中期の住居とは位置的にずれてはいるものの、直径約80mに及ぶ環状ブロックがあることが確認されている。また、前述の遺跡の他、環状列石や集石、環状木柱列などが全国的に相次いで発見されている。『環状』は旧石器人の間から続いているが、それを築くことが彼らにとってどういう意味があったのか。「環」の効果を考えた時、ムラ人がその縁に立って内側を向いたときに全員の顔を見ることができるのも、効果の1つかもしれない。

以上今回の発掘で考えたことをまとめてみた。未熟で見当違いのことを述べているところも多々あることと思うが、ご教示頂ければありがたい。また、共に発掘に携わった東部調査事務所芝山調査室の遠藤治雄氏をはじめ、芝山調査室の各氏には大変お世話になり、厚く感謝いたします。

註

- 1) 同じ事業の発掘で、墨古沢南Ⅰ遺跡より1か月早く調査を開始、縄文から中世に至る複合遺跡。
- 2) (財)印旛郡市文化財センター『千葉県印旛郡酒々井町墨木戸』1995
- 3) 桐原 健『縄文のムラと習俗』1988
小山修三『縄文学への道』1996
- 4) (財)山武郡市文化財センター『大網山田台遺跡群Ⅰー縄文時代篇一』1994
- 5) 松戸市教育委員会『幸田貝塚調査概報』1976～1986
- 6) 松戸市教育委員会『松戸市文化財調査報告書第7集 子と清水貝塚』1976 縄文時代中期
- 7) 船橋市教育委員会『縄文時代中期集落址調査報告書 高根木戸』1971
- 8) (財)千葉県都市公社『飯山満東遺跡』1975 縄文時代前期、小竪穴に対して墓穴との見解を出している。
- 9) (財)印旛郡市文化財センター『千葉県四街道市木戸先遺跡』1994 縄文時代前期、小竪穴覆土の脂肪酸分析で人骨に近い値が出た。
- 10) 千葉県文化財センター調査報告第324集『千葉東南部ニュータウン19 千葉市有吉北貝塚』1998
- 11) 新潟県青海町『史跡寺地遺跡』1987 縄文時代晩期、環状木柱列遺構を検出。
- 12) 能都町教育委員会『真脇遺跡』1986 縄文時代晩期、巨大環状木柱列・柱根を出土。
- 13) 長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書ー原村その5ー』昭和51,52,53年度
- 14) 前掲『縄文のムラと習俗』
- 15) 前掲『墨木戸』